

木下順二評論集

1960~1961年

6

未来社刊

木下順二評論集 6 【全一〇巻】

一九七五年八月三〇日 第一刷發行

定価一八〇〇円

◎著者／木下順二

発行者／西谷能雄

発行所／株式会社未来社

東京都文京区小石川三の七

電話（八四）五三二〇代表

振替東京八七三六五番

本文印刷／新協印刷

装本印刷／形成社

製本／今泉誠文社

凡例

一、本評論集全十巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理する。

I 主として演劇一般について

II 主として自作について

III 主として演劇外の問題について

IV (以上を「自」に即してのものとすれば) 主として「他」について

V 主としてシェイクスピアについて

VI その他(あるいは主として馬について)

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』(中央公論社、一九五九年、未来社、一九六七年)、『ドラマとの対話』(講談社、一九六八年)、『随想シェイクスピア』(筑摩書房、一九六九年)及び『シェイクスピアの世界』(岩波書店、一九七三年)は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』(文芸春秋新社、一九六五年)は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

一、本評論集は全十巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻 一九三五年から五〇年まで

第2巻 一九五一年から五三年まで

第3卷 一九五四年から五五年まで

第4卷 一九五六年から五七年まで

第5卷 一九五八年から五九年まで

第6卷 一九六〇年から六一年まで

第7卷、第10卷 一九六二年～七〇年及び補遺

一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他ので不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。

一、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集

菅井 幸雄
松本 昌次

*おことわり 紙数の都合上、当初は全8巻の予定でしたが2巻増え、全10巻となります。ご諒承下さい。(編者)

木下順二評論集 6

目次

凡例

I

日本の新劇とチェホフ劇——チェホフ生誕一〇〇年祭公演を見て……………	一一
俳優座の『桜の園』……………	二二
演劇科……………	二三
創作戯曲の現状と問題点——第一回全国演劇観客団体交流会において……………	二六
なぜ私はどう座稽古場建設に協力するか……………	三六
一つの前提……………	四一
詩のことば劇のことば……………	四五
現代演劇は可能か……………	四七
訪中新劇の旅から……………	五一
中国演劇から学んだもの……………	五五
むこうで観てきた演劇について……………	五九
昆曲の舞台……………	六六
俳優の声について……………	六九
ぶどうの会への手紙——会との新しい関係について……………	七二
アイルランドの演劇・文学と日本……………	七五

リアリズムと観念論	六
ぶどうの会の問題について——時評的感想	八
近況報告	一〇
新中国の演劇	一五
創造の主体について	一六
創造の主体について（続）	二〇

II

もう少し自由に——一九六〇年の抱負	二七
『おんによろ盛衰記』上演に当って	二九
『東の国にて』を書き終えて	三三
題名について	三七
作者は処女作に向って永遠に発展する	三九
『東の国にて』上演にあたって	四一
次の段階へ	四七
重さに耐えること	五一
子どものころの読書	五四
『赤い陣羽織』上演にあたって	五六

III

芸術家の収入	一六
あれから五年——伊那谷の友と考えたいこと	一六
二つの眼を	一六
座標（I）——あいまいさということ	一六
なつかしいドン	一七
停滞を打破する発条——国民文化全国代表者会議での感想	一七
心情的、だが	一八
二十六日の大衆——国会への大挙請願をみて	一八
雑感	一八
巻頭言	一九
巻頭言	一九
芸術と政治の一体性——単純な健康さということ	一九
土法	二〇
座標（II）——選択と決断	二〇
一九六〇・六・一五——国会前	二〇
一九六〇年——上海	二二

一九六〇年——東京	二七
安政条約記念切手	二九
『夕鶴』と安保条約	三二
拡散と集約	三三
心情的	三五
兎の肉の味について	三七
袋田の滝と緋鯉と	三九
旅の邪魔もの	四〇
中国の新聞	四二
もののしいということ	四三
歴史と創造の実在感	四五
日本の単純さ	四六
一九三七・七・七——蘆溝橋	四七
AA作家会議東京大会——一九六一年	四八
一つの提案	五二

IV

『ギリシア悲劇全集』に寄せて	六九
----------------	----

内村鑑三『後世への最大の遺物』……………	一九〇
金成まつ筆録 金田一京助訳註『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I』……………	一九二
亡友……………	一九六
近藤良夫のこと……………	一九九
編集後記……………	三〇二
「純粹舞踊」ということについて……………	三〇四
内村鑑三 大学時代……………	三〇九
心について——野村万作……………	三一〇
伝統と現代とのかけ橋として……………	三二六
カミュの死……………	三二七
チェホフ的聡明さ……………	三二九
作家の死……………	三三二
二種類……………	三三三
『遠くまで行くんだ』からの感想……………	三三四
選評……………	三三〇
選評……………	三三四
二つの歴史劇……………	三三六
プロデューサー・システムについて……………	三四〇

ブレヒトについて……………	三四三
『姉妹』と、そしてその先と……………	三四七
野間宏について……………	三五二
『英米文学辞典 増訂新版』推せんのことば……………	三六一
モームの戯曲……………	三六三

V

シェイクスピアの翻訳について……………	三七二
モローゾフの『シェイクスピア研究』について……………	三七八
英米文学史講座『ルネッサンス II』……………	三八二
シェイクスピアと私……………	三八四
イギリスで見た Shakespeare……………	三八八
『マクベス』の舞台から……………	三九二
シェイクスピアと朗誦……………	三九四

VI

ぼう然と快適なかけ回り……………	四〇一
------------------	-----

I

日本の新劇とチェホフ劇

——チェホフ生誕一〇〇年祭公演を見て——

チェホフについて書くのはなんとなくうれしい、ことに日本のチェホフについて書くのはうっとうしいというような気分が、私の中にまだまつわりついている。今度の俳優座の『桜の園』などを見ると、そういう気分は私たち日本人の中からも、もういいかげん追い払われていいはずなのだと思うのだが。もっともこの、もういいかげん追い払われてもという考えが日本のなかに出てきたのは、いつ頃からのことだろう。今度の戦後であることはたぶん間違いないが、敗戦のわりと直後に有楽座で、新劇の氣勢をあげるべく合同公演形式で『桜の園』がやられた時には、まだそうでなかったという印象が私にある。

なにしろ私は、永年のあいだ、チェホフはどうもよくわからない、従ってあんまりおもしろくない、にもかかわらず好きにならねばならないものであるような、という思いに悩まされ続けてきた。あの有楽座の時も悩まされた。そのわからないということの背景に、日本でチェホフが、まず舞台以前の文芸作品として、たぶん明治三十年代に絶望の作家として受け入れられ、

それから哀愁や憂うつ、の詩人として愛好され続けたということも、むしろないわけではない。だが、もっと直接に日本の新劇から、そのような固定観念の如きものを与えられた比重のほうが、どうも強いように思うのだがどうだろう。そしてそのことは、少なくともあの有楽座の時までは続いていた。

今度の『桜の園』の演出者である千田さんなどは、いつ頃からこういった問題を考えだしたのだろう。千田さんの演出による一九五〇年の『三人姉妹』は私は見たが、同じく五一年の『桜の園』はどうも見ていないようだ。私自身がこのことを考えだしたのは、ずいぶんおそい話で、五五年にモスクワで芸術座のチェホフをいくつも見、帰国してからゆっくりと間をおいて少しまとめてチェホフについて読みだしたあたりからのことだが、といってもそれは、芸術座の舞台がまるまるそのことを教えてくれたという意味ではない。むしろモスクワ芸術座は、私にとっての重要な契機だった。

だが日本の中に、リアリストとしてのチェホフを理解させる条件が、戦後も大分たつてからようやく生れてきていたということがあるのであって、ことがらとしてはこのほうが重要である。この問題の、日本の状況に即しての分析を少し細かく考えてみたいというのが、実はこのエッセイの最初の目的だった。そういう視点あるいは地点から、改めて私たちのチェホフ理解をはっきりさせてみたいということが。しかしとりかかってみて、病後の私の体力に、というよりもアタマの回転にとって、まだその仕事は大分な重荷であることを痛感する。残念ながら今回は、そこはかとなき感想に終るよりはかあるまいと観念するのだが、そうするとあのモス